菅頼系諸家事蹟　單

H20
468

東京帝國大學圖書印
B 23475

菅頼系諸家事蹟

鈴木圭輔

諱ハ圭、字ハ君璧、宜山ト号ス 弘道館教授（弘道館ハ福山ノ藩校）タリ、菅茶山ト交厚シ、天保五年九月廿六日没、年六十三、墓ハ福山市東町洞林寺ニアリ
碑文ハ篠崎小竹ノ撰、
宜山ノ子ハ秉之介ト称ス、字ハ師揚、篁翁ト号ス明治十七年一月十二日没ス、小竹ノ門人ナリ、

10 高知堂製

初代　鈴木順節始郷　始元資

妻　鈴木三桂嫡女　河中情左エ門常慎妙

正右様

寶暦九卯三月廿六日　二十人扶持本科被召出

同十辰十二月十三日　出康京

翌十一巳三月五日　在京

同年十一月四日　願之通京都引越

明和元申七月廿日　福山引越

安永二巳二月廿八日　奥御醫師

同四未二月廿八日　十人扶持御増　以上二十五人扶持

天明五巳二月三日　新知百廿石御直

寛政二戌十一月廿日　願之通隠居

鷗外藏書

茶山　寛政四、八月廿六日五人扶持　享和元酉七月廿六日御儒者格弘道館出仕大目付觸流同様紙之格令

□茶山　福岩御用掛相勤ニ付二百疋御用御免

○阿部社（今ハ阿部神社トナレリ）

△茶山同様

二代　鈴木圭輔　圭始圭雲　徳輔　妻　大橋郡兵衛英賢嫡女

天明八申十二月十六日　儒醫之場ニ被召出二人扶持

同月廿三日　弘道館學術世話取并御屋形御講釋

寛政二戌十一月廿日　百石被下置表御醫師本科

同七卯八月廿三日　眼科兼

同十午五月廿七日　儒醫

享和二戌十二月十五日　上下格御儒者

文化六巳三月十四日　奥詰

同年四月六日　□府詰御用相勤候ニ付御紋付御上下拝

△領

同九申七月廿三日　○御宮御造営ニ付御用掛

同十酉二月十五日　御使番格

松屋製

□茶山同様

同年十月朔日　□御宮御用掛相勤候ニ付金二百疋

同日　御酒御吸物

文政二卯四月七日　江戸在番

同年五月廿八日　於江戸月並御表之講釋并丸山學問所

出席之儀御儒者申合相勤候様

同年六月四日　別段御奥講釋相勤候様

同年十二月廿三日　毎月講釈相勤ニ付御紋付麻御上下拝

領

同三辰六月三日　大御目付被仰付奥詰并御家中學

問世話取是迄之通依テ御家中出會勝手

次第月並講釈并月番當用御免

同日　在番御免

同十七日　帰郷之御目見御紋付御帷子
同御着衣地御裃地拝領
同年九月廿日　郡役所吟味立會其外大御目付
諸廊口等皆指支候節者申合相勤候
様
同七申十一月十九日　御籍掛月番當用諸廊口相勤
候様
同年十一月十七日　御儒者
同日　御勝手諸詰御礼事之節者御勝
同十亥十一月九日　手役同様出仕御礼可申上旨
奥詰
天保二卯正月廿九日　江戸在番

松屋製

碑文小竹撰

同年四月十九日　月次御表之講義并丸山學問所
出席講釋　其外諸士取立之御儒者申
合候様
同年十一月廿三日　平日出精相勤ニ付御紋附麻御
上下一具并毎月講釋大儀ニ思召金三百
疋
同三辰五月九日　帰郷之御目見御着衣地御紋付
御帷子拝領
同五午九月廿六日　病死
三代　卓介　秉　後秉之助
妻今村五兵衛勝寛三女　後岡妻江阪弥蔵康成
嫡女

菅太中

- 菅波 樗平
  - 菅 茶山
    - 養子 三郎
      - お通
      - 貝二
      - 外二人
        - 何レモ幼時疱瘡ニテ死去
      - 養子 晋賢
        - 養子 文二郎
        - 長女 みさ
          - 晋子
        - 戸主 禮太郎
  - 桂二
  - たき
    - 三郎（茶山養子トナル）

備考

晋賢ハ茶山妻甥堯介ノ四男

文二郎死去ノ為メ禮太郎戸主トナル

樗平ニ至リ菅波本家ヨリ分レ茶山ニ至リ菅（スガ）ト改姓ス

松屋製

菅太中 晋帥

正倫様

寛政四子八月廿六日 五人扶持

中略

文化十四丑三月朔日 七十歳ニ付金五百疋

口 十五寅三月朔日 屋代太郎殿并御数寄屋御坊主頭益地了順老古今要覧ト申物御編集諸国風俗問状之内奥許風俗取調被仰付

文政二卯閏四月廿三日 右御答書指出

以下ナシ

香川景樹が漳州の牽牛花の種を得て植ゑつけたのハ菅茶山の書簡（貴稿伊澤蘭軒その九十四）に三十年前とある由なれとも之ハ恐らく誤かと思ひます、景樹の日記にハ享和二年の春四月真野敬勝より此の種子を貰ひ、やまとのとハことにて夕方まてる萎まて花もいとよろしとて「かゝる種あることを知らて朝顔を云々」と詠んだことが記されてあるからこの年初めて植ゑたものと思ハれます（といふ譯ハ其の牽牛花の花ハまだ見ぬけれども

松屋製

夕方まで萎まぬ花とハ珍らしとて詠んだ意ハ花とハ云ハで種といつたので解ると思ひます）夫から其の種子ハ茶山から直接ヨ贈られたのでハなくして備中の真野敬勝が京都ヨ來るとき携へ來り之を景樹に贈つたものと見えます、敬勝の上洛したのハ年月詳ならされども景樹とこの事ありし同二年五月五日ヨ古郷ヨ歸つたとあり[redacted]景樹の日記ヨ敬勝の名の見ゆるのハ是から以後であります。

上田芳一郎

井上通泰曰、大原呑響女婿也、（萱晋卿）

菅徽卿

耻庵ノ友ニシテ京師ニ遊ビシヿアリ詩歌ニアソブ

[illegible]ノ人

汝梗 ―― 万年 ―― 惟縄

圭二 耻庵ノ三男

関晃翁

関五郎 関藤ノ陰
中ゴロ石川文吾称

門田朴齋

妻備中國羽醫某女、名靜、明治二十四年頃歿、年八十、

朴齋明治五年頃歿、

四男梅五郎ハ晋賢嗣晋民、

右　　田邊晋子

朴齋寛政九年生、明治六年歿、年七十七、

霞亭手東ニ茶山ノ養子トナリシトキ二十四五ナリトイフ文政三年カ四年ナリシナラム

甲原玄壽之畧歴

玄壽諱ハ義、漁莊閑人ト號ス豊後國旧杵築藩吉廣村ニ生マル(今ハ大分縣東國東郡中武藏村トナル)寔ニ寛政四年一月四日也父ヲ玄易ト云ヒ家世、醫ヲ業トス幼時隣村富永村三浦黄鶴(三浦梅園ノ長子)ニ就テ學ブ

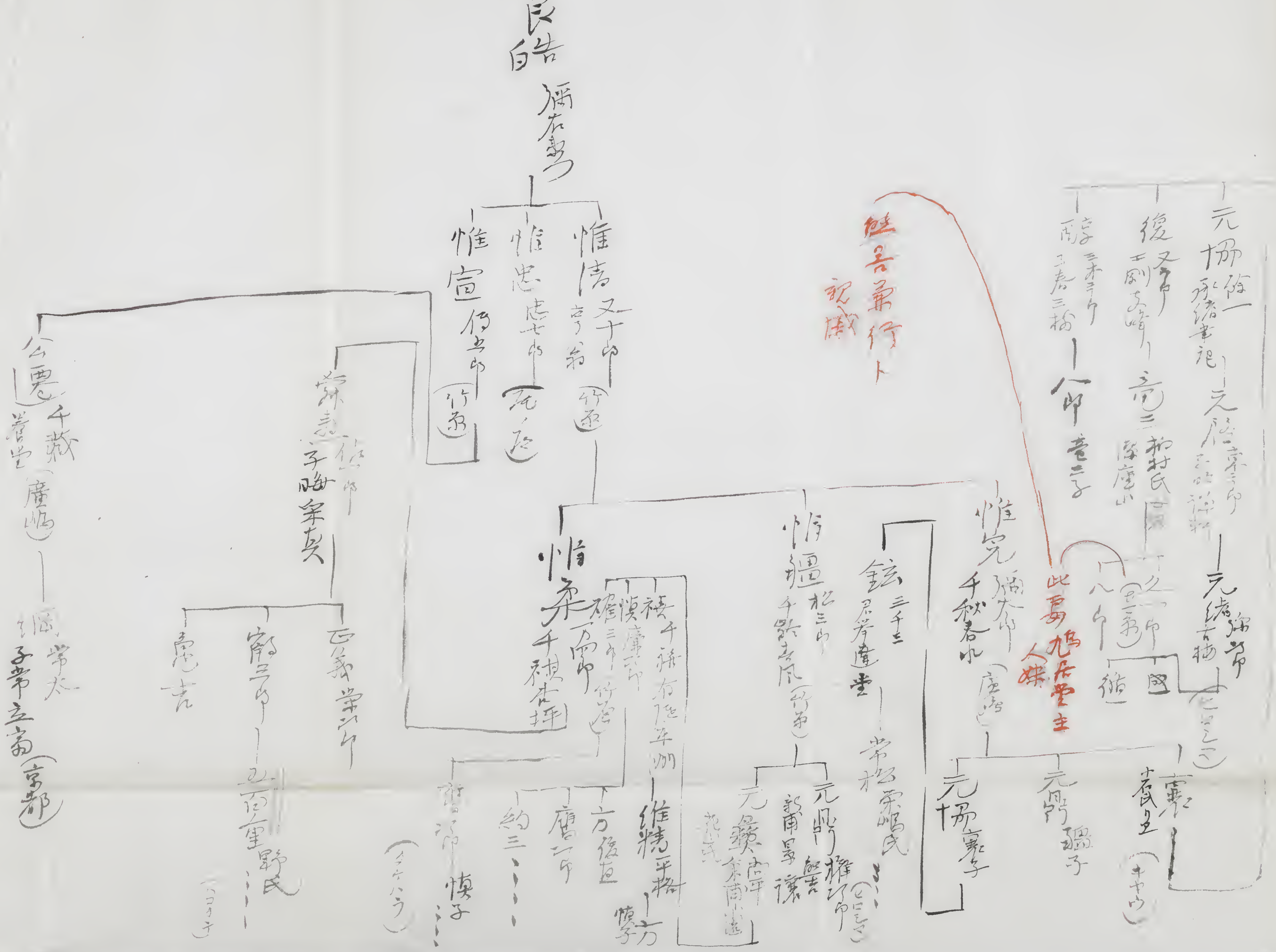
文化七年(月日不明)負笈郷ヲ出デ筑前國亀井昭陽ノ門ニ入リ學フコト三年偶、菅茶山備後ニ在リ關西學海ノ泰斗ナルコトヲ聞キ東上ノ念愈、切ナリ即チ文化九年(月日不明)筑前ヲ辞シテ備後ニ赴キ茶山ニ師事ス茶山喜ビテ厚ク之ヲ遇ス時ニ玄壽年二十一也翌年衆ニ擢テヽ塾頭トナル偶、

頼山陽田能村竹田等モ至リ一時ニ門ニ集マル玄壽之ヲ優待シ
塾頭ヲ二氏ニ譲ルモ二氏互ニ謙譲シテ兼ケス茶山之ヲ聞キテ
其謙徳ヲ稱シ二氏ヲ客分トシテ別ニ優遇シ玄壽ニハ依然
塾頭ヲ命セリト云フ
文化十一年師ノ奉シテ江戸ニ行キ翌年帰郷ス
文化十三年（月日不明）玄壽時我家業ノ医学修業ノ為メ許
得テ茶山ノ門ヲ辞ス玄壽茶山ノ塾ニ在ルコト前後五ヶ年
茶山深ク別ヲ惜ミシト云フ仝年大阪ニ出テ蘭醫齋藤方策、中
環、鳩野元達等ニ就テ醫学ヲ修メ傍ラ篠崎小竹ト交際セリ

文政三年玄壽年二十九家郷老親アリ倚閭ノ情切ナリ因テ帰国ス
然レトモ江湖ノ志勃然止マス文政七年親ニ乞フテ再ヒ郷ヲ出テ
長崎ニ至リ西人「シーボルト」氏ニ就キ研究十ヶ月偶、氏ノ帰国ニ
際シ玄壽モ已ムヲ得ス帰国ス爾後郷ヲ出テズ終ニ明治八年
三月廿四日易簀セリ享年八十四
生前旧藩主玄壽ノ学徳ヲ聞キ乗馬帯刀ヲ許サレ物ヲ賜フ屢ニ
且一日藩主郊外ニ花ヲ賞シ枉駕玄壽ノ廬ヲ訪問ハレ詩アリ玄壽
之ニ和ス当時ノ玄壽光栄得意可想也

右近藤俊吾報 大正五年九月二十二日

頼山陽



頼山陽

十日[illegible]寒[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]男子[illegible]
[illegible]
月[illegible]人[illegible]
世[illegible]

紀河の国にて二階の上なりけれは時も
蛙なき申し候ときは此よりかかれ様
痛之被出も為申候しも先ごく
晴にて頓安にて遣候と可申
シキリニ痛み故八生比安是哭
道免と存居候京都にて命上
二壁に一円好候無相成候記

先頃は吟味被遣候事詳にて不
抱え少々難行へ先も難く
一正居刻出居男子は至極大
骨折し壮大にて月の近く子の顔
ゆかし西鏡物体
先生人に酷者存しも金銀之基
後に再来於越へ旅何地けと一

国太郎に告げ済なし極貧なれ
く人の習也はし三葉加茄ね
百文を酒に呑みける代を買ひ與へ
金の御代わかちせし事和尚よりも感
三百国も一文に換へ理なし菓も出
国也来郎に世の中体に菓物
せし　初ての子なりかかる帰へ々ハ気

此君をも一献なれハあしく他家
三貫文を出でて之れハ家の三春をも
よろしくとて用ゐて娘ハ
私の身の為に苦労の程を思ふ
乱太に吉継にまで
者たりとて男子に
擁え親の思深きも

は、難有を
安穏大恩許を不可忘事を得
可申し先ニ字へあまりと北方
速に書きてもしるし我ゝ云ふ人に
内ニ包ミの国中人安木にては
相ニ事明且れ相仕のやら
とも書れぬ処ニ度て取捨

今日先氏方の物と見ん人々敵将法
書下りに暗法書てさゝ下し事の習にて
生レ子は年よ下への先しての
上成猶ぞ引続き書れらくのきぬ
相ニ致して三十日程置て語る
勤さるぬ為とよるゝいは申白
たれともしる字はいたし候

あるに祇園まつり抽からひて下へ
返れに餅搗揚くたりけし勢ひ
去年の其の後になりて成
一般は当年は花折ける　ヤトヒ家
一人法号ハ時に逢ひしし棺花書無
採訪結母も年ま後は人是千載
と此ほどへのミ言も庄嶋も国権

かくして乱世後は小大名一人置きて
自門にて后成ともなじともなき
として藩下し東覚角年人も
葉にも外に面へ姫申も立働妃
跡継乱子は大臣人の事せも安く
とも見え人し　三種の後ハぬかれ
後成子は先に取りし　成家何とも言い

御手少々ハ乱作気にても、たまり
すとこれ存し先後の七ヶ所差度
〆惜も竜花生れ茂れもひし乱
元所好キラレまゝ乱気て
手に参ての様ハ直にすし、候て候
是も親もなき一人の姉に様もなき一人

の継子にハ此頃しきりハ着き、
まて結先ハ五郎も悦女
先便日出勤之時ハ話申し
め氏ハ其伊丹伝の上に下
参と思い十月頃の写しを参りや
二十三日頃迄下り候て石つ
十月十二日
寅
母上様
御一同 御覧

南総原了にて書也[illegible]

今日東京母妃染影より妻細にてよ
氏様くれゝ人ニ老母五ミ母が及
隔てあまり一の書酒様ニてさく
先日母の桜花にし様と一出ニ
謹呈申上候一筆以て江戸也仕申
くれ人以下総代名前にて
小豆様の為面以積以限に九分

御たち様へ上りし也

当〻未花

襄

十二月二日

母上様

能一同謹

尚後呈東ましハ只今もたんとく物

いもらひて上鶏鴨子らハ気やらし候

おとじカモノカノ字ハ越子ト

よし鐘卿第一論候のすのうし

百種もらひ下され

十日會茶ニ寔甚殊令承知候ニ付何寄申遣
於先沙當先生被仰候趣公御返答候
二承候遣候處之日等書付印候
公拝翫去之ニ而先年致承候而候而御馳走ニ
存居候若便々ニ而相成候而此之候
承置致不候共ニ遣ス便宜致候
便也 猶ニ而御沙汰候而即相成申候
好ニ候 先年御覧之上ニ而候 頓首
五月二日 某

品関藤存隆

元太郎 早世

妻中村氏

後嫁吉川氏 再嫁

佐原純一

一人子

ヨネ

嫁真野某作

女子

嫁大友凉、

成緒

養嗣子

成緒

國助

大正五年十一月

十二日丁年忘

工学士

牛込南榎町八十一

九月十九日

中村星野卿標

宮原潜

牛込区南榎町八十番地
森林太郎様

関藤國助

拝啓過日旅中ヨリ突然一部書呈上仕候処早速御返信ヲ
頂キ奉謝候陳者御申越ニ任セ御参考迄ニ前回申上候
文書写封中備貴覧候間御落掌被下度奉願上候
尚前回旅中申上候事ト多少内容相違ノ点モ有之候ニ付
此段御詫申上候先ハ一昨夜帰京仕候ニ付御報旁御返
事如此御座候匆々頓首

高知堂製

No.

年　月　日

第廿拝

一昨夜者大酔久々ニて散欝ニ候三木三郎君事ニ而後ハ
日々あとくり有之候様公より御加鞭被下候様奉希候後
室よりハ被申候ても不聞者ニ御坐候此義乍御面倒宜
煩候不一

五郎様

三郎

○

陸山児玉三郎

○

三木恒綱

文化七、1
文政二、10
文政十三、20

天保十、30
嘉永三、40
嘉永六、50
万延元、57

No.

年　月　日

第二

何ソ御覧ヲ差上度候ヘ共有合不申此節着二冊致呈上
候御繁留被成可被下候

八月十二日　杏坪

関五郎様

国助註、此手紙ハ天保四年ノ頼塾ヨリ帰省九月江戸
昌平黌ニ遊学ス前廣島ニ赴ント時ノコト推定ス
外ニ頼帳ノ詩アリ八月十二日夜トアリ

東京 三越製

No.

年　月　日

英乙

京寺町本能寺前大和や喜三郎様御内

石川潤五郎様用事　　秋山伊豆

状ちん相済

国助注　此手紙ハ見当ラズ　秋山伊豆ノ手紙トシテハ一通
讃州府志成ル頃文章添削ノ依頼文アリ文中ニハ府志
著述十ヶ年トアルハ此手紙ハ後年ノモノト推察ス、従テ右
此状トハ別種ノモノト思ハル

No.

年　月　日

或謂轄襄曰云々……

右南北朝論蓋政記在両統合一之條已有一論近有客發此議說吾欲極論之而有肺疾不可劇談遂更作一論九月十二日夜咳不能寐就枕頭腹稿明日録稿如此疲困綿綴精神止此不能精思也

喜聞吾友声々疾笑相迎笠裡出新著病夫之課程丈夫
知已往生化向前行有酒尤拈住体嫌不共觥

喜小竹来問疾　襄

東京三越製

No.　　年　月　日

卷末五律去秋九月十六日所作去易簀僅六七日盖係絶筆
矣子成大喜余向疾且出南北正統辨曰猶飼翁当時巨擘
而出此言非細事也僅雖亡亂矣不可不辨焉是其稿本也
嗚呼子成平日以人倫世道自任抵死不衰如此非一代偉人哉
世徒以史學文章称之非知子成者也永訣後既易衰暮
今閲此巻凛々如生距乃去今数百千載子成豈死而朽乎
哉子成喀血自知不起昼夜操筆綴成其政記十数巻
衆医沮不聴君達侍奉随綴随写子成喜曰此子助成吾
業者矣因授此稿々在君達乃傳道之衣鉢五律題為余
作而余不能奪也

天保四年癸巳八月小竹散人篠崎弼書

岡山縣淺口郡長尾村

小野方

務　伯本　本太郎　孝卿　京本、孟本

女子

達（イタル）　宗藏

女梅　嫁小野壽

女鷹

養嗣　強　配鷹

女義美　嫁小野久徵

節　久徵子

[illegible] 大正六年一月三十日附新宅宗平の手簡と

小石元瑞後裔

小石元瑞 ― 忠造 ― 馬太郎
第二郎
守

馬太郎ハ他業を営む、下京辺に別居

第次郎ハ、東京大学別科卒業、明治十四、五年頃京都病院に奉職、既に歿

某ノ子を遺し、此馬太郎ノ子幼名

長太郎を養はれて家業を継ぐが

しも、現ニ四國伊賀橋院ニ在り、京
都府立病院ニ居の本業
守ハ他業を営み、京都ニ住る無
中生方歳ひ中石前の手本

○弘化三年正月小石前の状の端ニ記
〃　〃　〃　〃　孫児も在り常長れ悦ヤ
老拙も此年ハ登坐東家ニ向ヒ故春琴子
宅ニ暫く住候

○弘化四年正月の状のはし書きし
寺年来ニ我儘中城ニ束ねし宮竹
江陵ニ参りも條々中ノ部ニ由尤、ニ参

子の名ハ名お守方卯ノ中ニ嬌孫ニ面
中義の嫡子ニ候守方卯悦ありし
〃　〃　〃　〃

中充が代つて議職となる、人等が心服
[illegible]

新字取額ハもと同家の門人ニて京都住の死人ニ
周旋せしあるが忠進ト中充○中玄の嫡
子守方卯ト云陽の手紙ニあるまい或ハ細井せし
[illegible]守方卯と[illegible]一明も不明にて近
年伊賀[illegible]依頼して出

小石事[illegible]

万々御推察可被下候[illegible]

二月[illegible]

[illegible]

[illegible]様

12 神田神保町通り 宮田製

三箇(サンガ)家

初代　三箇角兵衛頼雄　始孫四郎

享保十八年(丑)六月廿一日於江戸御出入扶持六人扶持

仝年九月廿日被召出御廣間給人新知百石当分大阪

表御用尤御用無之節ハ江戸或ハ御在所ニテ可被召

仕之旨

二代　角兵衛時朗　始鹿助

宝暦四年(戌)十二月廿八日新知百石福山引越御廣間

御番入

年月略 〃 御密目役 〃 御徒士頭 〃 御供番頭

〃 御使番頭 〃 町御奉行 〃 御長柄奉行

安永九年(子)三月七日　自殺

三代
角兵衛知雄 始津之助
安永八年(亥)十月十五日御供番被召出
文化六年(巳)三月廿八日上下格坂上御番
文政元年(寅)三月十七日御使番格
仝五年(午)七月十七日印西流弓術世話取
仝八年(酉)正月廿九日右世話取御免
仝十一年(子)三月朔日五十年来勤仕ニ付御紋付御
小袖拝領
天保二年(卯)三月朔日七十歳ニ付金五百疋
仝三年(辰)十二月廿六日病死
八十吉林雄
妻高久荘太郎隆次妹

寛政九年(巳)十二月廿日月並五節句且非常共出仕
享和元年(酉)八月九日弘道館試
文政元年(寅)十月十七日御近習
仝十二年(丑)七月廿九日病死
四代
孫四郎頼雄 後角兵衛 後重挙
実松村甚五兵衛次男
妻養父林雄嫡女
文政十一年(子)七月廿五日願之通秫雄養子
仝十二年(丑)十二月廿九日嫡孫承祖
天保四年(巳)二月廿七日祖父角兵衛跡式 十人扶持 御廣
間番
嘉永三年(戌)三月廿九日印西流世話取同様

此已下不明

○鵜川宇平

昌蔵政醇

勘定方、給人

女

中澤茂蔵室、茂蔵六七年前歿、未亡人年七十許、寓奈良驛助役某許、従弟有伊澤猪三郎者、死于福山、

勇蔵

「安 住東京

「安田上忠三室、年三十許、

大正五年記

○寛政六年三月朔日、大目付今川剛八傳命、二

日、真野群左衛門頼恭寧町野喜三郎武田多

三郎、紫山乙五郎登廳、

「於御席去年中文学出精之旨達御聴御満足被

遊尚又出精可致旨被仰出此段平助殿被仰渡

サし

○享和二年八月十四日、大目付齋藤貞兵衛令徒

目付言、

「紫山源之進次男乙五郎事思召有之御供番格無

足之場江御雇形ニ而被召出、儒者見習ニ被仰付
候依而二人扶持被成下大目付觸流被仰付候旨」

十六日

「太田八郎自分連名ニ而六浦国治より手紙ニ而
紫山乙五郎儀月次御講釋被仰付候間申合候
様、且又御家中文学世話とも被仰付候旨」

○伊藤梅宇、重藏、福山文學、

貴稿伊澤蘭軒其ノ百六十七ニ寛政甲寅仲秋ノ巨
米子虎、松孟執
椋湖ノ同遊六人ト御記載アリシハ六人ニハアラ
デ八人ノ様ニ候同年ノ同泛舟椋湖三首ノ引ニハ
成程六如上人、蛎崎公子、伴蒿蹊、橘恵風、大原雲卿五
人ノ名ヲ記シアレトモ此ノ外ニ米谷金城ト松孟
執ノ二人アリ乃チ茶山ト合セテ八人ト相成候右
ハ其ノ後ノ文政元年戊寅ノ茶山ノ詩集ヲ見ルニ
伏水道中ノ引ニ寛政甲寅中秋蛎崎公子六如上人
伴蒿蹊橘恵風原雲卿米子虎松孟執及余八人泛舟

干椋湖ト有之又題米子虎藏椋湖賞月図ニモ同遊
八人今僅存汲響公子米子虎及余三人トアリ圓山ニ
於テ金城ニ邂逅シタル時ニモ八人同侶五人亡ト
歎セシニテ知ラレ候

○[illegible]
○新[illegible]
椋軒詩集ハ　[illegible]日ニ[illegible]有之、
椋軒先生[illegible]候、湖門ニ記載諸輯有之可
有之処、椋軒見ラレ候テ再度京東ノ詩題
ダケ記載順次ニ左ニ抄録シ開ヲ待ツナリ、

椋軒詩集　四ノ巻　辛巳ノ年

○水晶花
○送賀宇先生（北条）応召赴東都（莫為啼鶯思故園ノ句）
○聡野眉水一丈詞伯｜｜｜
○奉寄北条先生（秋宇浩庭蟋乱鳴ノ句）

千椋湖ト有之又題米子虎蔵椋湖賞月図ニモ同遊
八人今僅存波響公子米子虎及余三人トアリ圓山ニ
於テ金城ニ邂逅シタル時ニモ八人同侶五人亡ト
歎セシニテ知ラレ候

○水晶花ハ卯の花 先ヅ匡生ハ門田朴斎ノ令子 杉東先生ヨリ詩歌承候事
○淡門登流右衛門 字ハ子楨 か ○門下ナルベシ 號寛 仕方ニ付し

軒題後ハ西口清安ヨリ入ロ薩摩方へ
ロ鄭重ロ方教ロ判是ヨ下相忍入ヘ
棟軒詩集中（十月五日）（五日）ニ付ロ疑問有之ヘ
棟軒第軒補後ハ淡門氏記載諸韓自筆可
有之飢ハ棟軒見ラレ候ヘ再度東京ノマヽ詩題
ダケ記載順次ハ左ヘ抄録ロ用ヲ得シ中ヲ候ヘ

棟軒詩集　四ノ巻　辛巳ノ年

○水晶花
○送賓亭先生（北条）居留赴東都（莫為啼鶴思故園ノ句）
○秋野荷水ハ石詞伯ーーー
○奉寄北条先生（秋寒満庭蟋蟀乱鳴ノ句）

字花
内藤氏ノ耕
名
内藤氏ノ系
虎今阿部郡
中、勤務ス

◎奉送雲亭北条先生携家赴東都序　有五月

未老専擧作復来、重栄寵命従不辭、ノ分

○今茲文政辛巳冬十月二十有二日葬柴茶先生於

城西之曇山定福寺孝子伊藤君健庵………

◎山水図ー

◎凝翠軒把飲

○食筍　御弘道館

此詩書置、波紙ニ

今村達般トシテ

弁居誠之ノ前後、ワ題、

◎訪村緯夫

◎吾木犀会席上別雲亭先生

聊開祖席木犀前、非峯大都奈別懐、此会他時君記取、

當看量殺杜菊柴ノ分

◎煎茶図

○喜雨

老農祈雨又祈晴、我亦近来関此情、昨来時雨虜看書、

農事之暇賀詩興、数畝秧田手自挿、聊解旁疲酒一航、

林鳩々々呼好雨、一時宿巷苦飲声、

◎ノ分ハ詩中引証スベキ句モ故、記セズ

食筍　御弘道館

紫竹擇斑文猶帯泥、那論時物価高低、従投炉底焼摩爛、

先就池辺洗馬蹄、風味非魚差濃消、雪膚如玉更柔荑、

貪饞未問生何処、不是漁園定渭濱、

回不日真野幸作様ヨリ先生ハ罷テ近生拝
呈阿部神社奉祝詩一綴郵送有之成
箋ニ付猶落文字ノ為メハ多忙中恐入候得共
一度ハ寓目の労煩とり度強てハ願申上候、

◉鵜川ノ家返翰ニ来ル、昭和未詳ニハ是、但し政醇
ハ明治十三年ニ七十三才ニテ福山ニテ死去らしく候

回柴山が阿部神社於ゑハ 柴山 敬 トアリ
（印）ラしク候

太田全齋 子孟昌

太田孟昌ハ阿部伯爵家ニ所蔵ノ太田家由緒書
太田八郎経方ノ條ニ
嫡子 太田昌太郎 周
病人ニ付 勤仕無之
太田又太郎 武群 始信助
實 次男

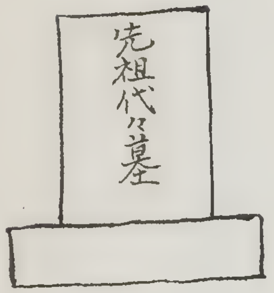
文化三寅十月二日 願之通嫡子
トアリ、又、川目直、校註韓詩外傳題言ニ
太田叔亀有活版韓子翼毳 名方 号全齋 福山藩臣 其子孟昌

及張茶庭有筆記数編云々
トアレバ孟昌ハ全斎ノ長男ナリシコト明ナリ
尚、文化十三年ニハ孟昌廿八歳、全斎五十八歳ナリシナリ
因ニ全斎ハ文政十二年六月七十一歳ニテ歿セリ（蘭軒ト同年ニ）
之ヲ天保六年六十一歳ニテ没シタル棭斎ノ門人トスルハ年齢
ノ上ヨリ見テ如何ト思ハル乞高敎
第七十四回　茶山ノ江戸ヲ發シタル月ハ　菅太中 晋帥 由緒書、
文化十一戌二月廿六日就御用出府　十二亥二月廿四日歸郷ニ付
御紋付麻御上下金五百疋トアリ
（菅太中由緒書ハ福府叢園ヨリ拔録）

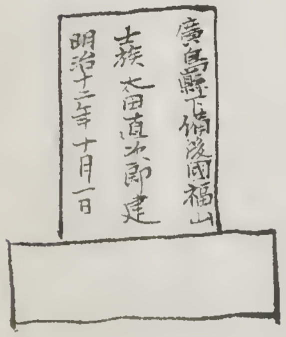
10
南鍋貳(吉)製

太田家ノ墓
芝公園地内、永平寺出張所内天光院墓地ニアリ
太田家ノ菩提所ハ林松院ト威徳院トナリシモ後廃
寺トナリ現今ハ天光院ニテ之ヲ管理セリ
全斎ノ墓今ハナシ明治十二年十月一日太田直次郎
トイフ人先祖ノ合葬ヲナセリ故ニ天光院ニハ左ノ
如キモノヽ存スルノミ

表面



右側



森島樸忠

金十郎ト称ス、実ハ伊丹忠寛ノ次男、

歌ヲ書キタル短冊一枚予之ヲ蔵ス

松屋製

初代　森島新左衛門忠上
正次様
於江戸二百石御廣間御番被召出
延宝八申年於岩附病死
二代　新左衛門忠久　始金右衛門
元禄十七年申於宇都宮病死
三代　新左衛門　忠好　始新五郎
享保未八卯年九月廿二日於福山病死
四代　伊丹忠州　始新五郎　忠貫
拝領名伊丹　妻養父忠好養娘
實茂上易右衛門　盛利次男
明和五子年八月十七日願之通隠居

五代　伊丹忠寛　始新五郎

妻　家女

寛政七卯年十二月廿八日再願之通隠居十人扶持

先養子一石馬弥五右衛門三男小三郎　安永五年

二月七日願之通養子

養子右門忠貞　実三浦平十郎重雄弟

妻　養父忠寛次女

天明二寅年六月廿三日願之通再養子寛政

三亥三月廿日離縁

松屋製

横忠

六代　伊丹忠利　始金十郎

実次男

妻　吉田端守利民娘、三浦平十郎重雄

養女

寛政三亥年十一月廿七日願之通嫡子

同年十二月十二日五節句月並且非常共出仕

同五丑九月廿七日為事馴候御供番被召出

同七卯十二月廿八日跡式二百卅石御広間番

享和元酉七月廿一日御使番

同三亥六月十五日火事場御目付兼役仮役

文化二丑三月十六日大御目付

同日御箱掛り

同 五辰 十二月廿三日 右掛り御免御仕置御定式掛り
御普請掛り御除銀納方掛り
同 七午 十二月廿二日 朝鮮人来聘ニ付 公義御役人様
方御通行御用掛り
同 八未 二月廿三日 御者頭席
同 十二月十五日 右御通行御用掛相勤ニ付御意
同 九申 七月廿二日 御宮御造営ニ付御用掛
同 十酉 五月七日 中山斧介元組 郡御奉行寺社兼役
大御目付兼役
同 日 吟味掛兼御収納方吟味掛兼 明月番
同 十一月朔日 御宮御用掛相勤ニ付銀一枚御酒御吸物
同 十一戌 二月三日 郡中大割吟味掛り

上下拝領
文政元寅 十月十七日 御番頭格
同 五午 二月十七日 御用人格
同 十二月十七日 御用人
同 七申 七月廿七日 江戸ノ在番
同 十月五日 当暮若殿様御叙爵ニ付御用掛
同 十二月廿二日 右御用掛無滞相勤候ニ付銀二枚御
酒御吸物被下置
同 日 若殿様へ干鯛一折奉指上
同 八酉 八月廿七日 敘爵之御目見御意拝領物

松屋製

同五辰十二月廿三日 右掛り御免御仕置御定式掛り
御普請掛り御陰銀納方掛り
同七午十一月廿一日 朝鮮人来聘ニ付 公義御役人様
方御通行御用掛り
同八未二月廿三日 御者頭席
同 十二月十五日 右御通行御用掛相勤ニ付御意
同九申七月廿三日 御宮御造営ニ付御用掛
同十酉五月七日 中山斧介元組 郡御奉行寺社兼役
同 日 吟味掛兼御收納方吟味掛兼 同月番
大御目付兼役
同日御宮御用掛之儀大御目方兼役之場ニテ是迄
之通
同月九日 御備掛り

正寧公

同年二月七日 町御奉行兼役
同十三子九月廿七日 大御目付兼役御免 御紋付麻御
上下拝領
文政元寅十月十七日 御番頭格
同五午二月十七日 御用人格
同 十二月十七日 御用人
同七申七月廿七日 江戸在番
同 十月五日 当暮若殿様御叙爵ニ付御用掛
同 十二月廿二日 右御用掛無滞相勤候ニ付 銀二枚御
酒御吸物被下置
同 日 若殿様へ干鯛一折奉指上
同八酉八月廿七日 敏郷之御目見御意拝領物

正精公

同九戌十一月十四日謙徳院様御遺物御織物一軸法橋

某画

同十三丑二月十五日御城番席是迄之通

天保三丑六月廿五日御城番本席

同八酉十月十三日再願之通隠居十人扶持

七代 新五郎 忠同

妻中西武助吉周嫡女 後妻磯競 永伯母

天保十亥三月廿六日病死

八代 金十郎 宥忠

妻中山十左衛門光定次女

松屋製

森島樸忠ノ孫鶴岡耕雨ヨリノ回答如此 鶴岡

氏ハ備後芦品郡府中町ニ住ス

森島伊丹樸忠 初称新左衛門 隠居シテ號湛然

旧福山藩士 禄百參拾石 御用人并郡宰ヲ勤ム

和漢ノ学ヲ好ミ和歌漢詩ヲモ好クス 菅茶山福羽

野口寧同友タリ 松本良遠（福山ノ歌人）ハ湛

然ノ弟子也 弘化二年歳七月十日病死ス 福山

妙法寺ニ葬ル 七十一

詩 録一

松声竹韻更春風 昨夜今朝人不同 四海太

平汝年日生来錯作古稀翁

歌　歸一

かゝみともむかはぬと恥しなきつり

年まける七十の春　久之廼会老人

知案　阿部家所蔵由緒書ニ始金十郎トアリテ新左衛門ト
称スルコト見エズ　樸忠ノ子新五郎ナリ　混同セシニアラザルカ
或ハ二称アリシカ　友人ノ報ニヨルニ樸忠ハ金十郎ト称ストアリ
弘化二年ハ巳ニシテ午ニアラズ　二年ハ三年ノ誤カ　或ハ午ハ
巳ノ誤カ　老人ノ誤記因却ナリ　濱野知三郎

十行　光榮堂製

馬屋原伯好

醫師馬屋原ハ初代二代共ニ玄益ト称ス、
福山志料（菅山編）第十二巻神農廟ノ条ニ「福山ノ
町医馬屋原玄益ナルモノ享保廿一年ノ神農ノ像
ヲ彫刻シ封内ノ医師五十人ト相ハカリ再建シ侍リ」
トアル玄益ハ蓋シ初代ナランノ、伯好ハ其子カ孫カナル
ベシト思ハル、

馬屋原家ノ墓ハ福山市西町永雲寺ニアリ、

初代　馬屋原（マイバラ）玄益寧成

正倫様

安永十丑三月廿六日　十五人扶持表御醫師本科被召出

寛政元酉四月十三日　病死

二代　馬屋原玄益順成　始玄周

妻安那郡上竹田村鼓文平娘

寛政元酉六月十五日　十人扶持表御醫師本科被召出

同八辰十二月十七日　三人扶持御増

同十二申八月廿五日　江戸在番

同十三酉正月十四日　運之助様　瀧五郎様　熊五郎様　其外御姫様

方へ家傳疱瘡御薬奉差上候様

享和元酉九月十六日　糸井順庵与交代

同月廿一日　在番中出精且當春中御藥差上候ニ付金五百
疋拝領
文化二丑二月十七日　於中奥御姫様御誕生ニ付右御用掛
同三寅十二月廿八日　来春於純様御出府御供立帰
同卯四月廿六日　帰郷御目見金二百疋従於純様白銀二枚
拝領
同六巳三月廿八日　二人扶持御増　以上十五人扶持
同九申四月廿七日　奥御[redacted]醫師
文政十一子九月十六日　病死
養子馬屋原周山世成（實弟）
寛政十午十二月五日　願之通養子
同年三月廿三日　月並五節句且非常共出仕

松屋製

文化元子正月十一日　病死
三代　周迪成美後恕庵又玄益
妻松平安藝守様御領分西村郷士堀川次郎三郎妹
文化十五寅正月廿九日　月並五節句且非常共出仕
文政四巳十二月十五日　表御醫師本科被召出二人扶持
同七申十二月七日　十二石
同十亥三月廿七日　醫學世話
同十一子十二月十九日　亡父玄益家業相續ニ付十二人扶持
同十三寅十月五日　奥御醫師
天保七申十二月廿七日　三人扶持御加扶持
同八酉四月朔日　江戸在番
同年十一月五日　於福山醫學世話被仰付置候處於江戸

表同様被仰付

同年十二月十二日　お豊様御誕生御用掛り

同九戌閏四月七日　帰郷之御目見

同十三寅十二月十七日　二人扶持御加扶持

弘化四未十一月十七日　三人扶持御加扶持

松屋製

横山家畧系

宇多天皇 ― 敦實親王 ― 源雅信

秀義 ― 定綱 ― 信綱 ― 高信 ― 教綱

頼信　横山三郎左衛門尉　河内守 ― 頼有　横山五郎左兵衛尉　阿波守

教文　横山左衛門尉

横山次郎右衛門 ― 横山左衛門行時　阿部正邦公奉仕

- 横山隆左エ門行道（阿部正右公 正倫公奉仕）
  - 横山是一郎行忠（阿部正倫公 正精公奉仕）
    - 横山豊一郎行在（阿部正精公 正寧公 正弘公奉仕）
      - 横山正一郎行篤（阿部正寧公 正弘公 正教公 正方公 正桓公奉仕）
        妻 棚若成之妹
        - 横山政一郎行治（修道中学校勤務）
          - 継（陸軍歩兵中尉）
          - 順（仝）
        - 女子
        - 廉次郎（陸軍歩兵少佐）
        - 重雄（薬剤師）
        - 季雄
      - 女子 根岸成之妻

英隆公墓在岩槻浄国寺故　良徳公実為八世孫其建石
燈使門田惟欽撰文小島知足書之而命董工役者横
山行在也事既畢功特賜搨本一部於行在什帖
即是也行在既歿矣嗣子行篤嗚呼忠然書一言於
後忠恕謂先公之恩寵其之人之遺也於重藏于
家固宜然也況　良徳公勲業治功与赫々世之
所知而惟欽知足並以儒臣擢名於文林
而名不易得之人也今遠合之於一帖且為家
什宝理也亦大矣

明治七年五月晦日

土屋忠恕謹識

字子孫平岡脩州平拾葉丁　行在次男　横山一之助行篤
天保三年二月廿八日江戸ニ生ル
明治十七年十月十三日備後福山ニ死去
剣道之師　今村多助　鎗道之師　海塩文蔵
馬術之師　斎藤東作　同　山本加兵エ
文学之師　石川和介　高道　前田五蔭
〃　鈴木兼之助　〃　石川文亮
〃　木谷良蔵　〃　神宮寺
〃　川田貴佐
高道　木村七良

横山廉次郎

葦川遺稿

序

「余弱冠與葦川藤井同在吾姉夫江木鰐水之塾。葦川少余四歳。」「既而更学于村上佛山、宮原節庵。」「後数年。余在東京。葦川飄然来訪。」「後二十餘年。予归郷居横尾。葦川不得志。為村学師。」「予時年已五十有八。」「葦川名乾。稱吾平。葦川其號。備後山手村人。其死在今年三月。明治廿五年十月上浣。旧友訥堂居士　五十川淵識

藤井葦川

于大阪浪華橋北之寓樓。」

葦川遺稿

備後　葦川石井貴太郎著

西遊小草

「慶応年間。余与友人長之清末某氏。欲負笈東肥。遂客其地。而亦不果行。乃入豊之稗田村上佛山翁塾。数月帰。」「清江贈無着岸峰」「前豊訪村上佛山先生。」「訪天地哲雄師。」「庚寅春日坂田丈妄評。」「庚寅三月上浣七十二叟三濱純敬評。」「庚寅三月

初六贈林双橋生英妄言多罪。」「一月一日不知何年訪石井氏」「次黒川君韻」「偶鐫舎小集。」「六月十二日与藤井士行散策」「戊子十一月廿日携加納鉄冊堀内扶桑後藤芝洲諸友人散策於郊外。」「余寓居図引ノ田村之向。中略適原藉堂夫人来訪。」「金丸小寓。」「己丑臘月夜訪高木君。」「訪信岡普一君。」「送信岡輔郎君之広島。」「祝齋藤次郎君任其田品治神石甲奴郡長。九月自平高木君見似祝齋藤郡長詩。中略因次其韻。」「貪甚。戯賦贈博練教授令討甲斐竹渓。」「博練教授生徒所佛光閣雑誌成。」

「明治廿三年十二月三十日呉故郡長三浦義建君。君選為衆議院議員。」「之田村寓居所得。」「呉藤井蘇堂翁。相識卅年如一日。」「濱野穆軒兄来訪。」

「御宛者廣嶋縣備後国芦田郡府中市村百十番邸

鶴岡畊雨」

拝啓 伊澤蘭軒の事につき村木三助氏の依頼により失礼をも顧りみず申し上げ候。

村木氏は十七日前死去致されまし。

其の時頃迄、一月十六日付けの森博士よりの書信を出し小生に示して病気の為めおしめしの半紙形の紙に書きて事実を博士に申し上ぐる事不可能につき汝に依頼すと申され候。小生は事実をばよく知り申さずといへども地方にては阿部家に出入し居る醫者伊澤家の者が正弘公を弑したりと噂し居り申しまし。但し現今は故老のうすら覚えくらひの事に候。又正弘公病

澤田

氣の時地方醫窪田老先生ー窪田二郎氏にして其の家は阪谷芳郎博士の親類にこれあり候ーをめし抱へんとせしも先生は農民を救はん目的にして確く其の栄達を度外に置き、辞され申し候、と小生の祖父申し居り候。小生等も毎年盆時には其の墓に参て拝礼し居り候。杉木氏の申されし●時代の誤られ居りしは博士の書信によりて明らかになり候しかし而して柏軒の家はもと福山最善寺町の西通り學角にありし由にて今はシンガーミシン女学校とか貿易輸出品製造所とかの様なもの、建物これあり候 取り急ぎ乱筆に認め候失礼の段、お許し下されたく

三月六日

謹言

廣島縣福山中学校
井伏満壽二拝。

森林太郎様

驥蔵目記

右福田禄太郎蔵本印記（此頁内欠）

同上表紙裏表文

春木金太夫所贈

氣の時地方醫籠窪田老先生－窪田二郎氏にして其の家は阪谷芳郎博士の親類にこれありて－をめし抱へんとせしも先生は農民を救はん目的にして確く其の栄達を度外に置き辞され申し候と小生の祖父申し居り候。小生等も毎年盆時には其の墓に参て掃墓し居りて。杉本氏の申されし時代の誤られ居りしは博士の書信によりて明らかになり候ひし　而して柏軒の家はもと福山

柏軒 [illegible] 拝。

三月吉日

右福田禄太郎藏本印記（此頁内欠）

驥宙日記

川崎敬軒

福山鈴木藏書印

湘靜珍藏

同上表紙裏文

春木金太夫所贈

○

備後人

本荘重政。稱李左衛門。號儕情。仕福山水野
氏。後拓沼隈。
山岡次功。稱八十郎。西山時上書論攘夷。嘉永
庚寅八月廿四日。屠腹于本郷西片町家。葬于本
郷元町西信寺。
山路機吾。沼隈郡藤江村人。父鳳鳴。林菴名重
商。稱熊太郎。師小竹、曇樹、章文。友拙節齋、
鉄塊。明治二年九月[illegible]歿。

門田朴齋。名重隣。字堯佐。小字小三郎。又堯三郎。
明治六年一月十一日卒。
江木鰐水。名戩。字晋戈。一号三鹿。称繁太郎。
安藝豊田郡之野福原与曾八第三子。為医于福山
五十川菽齋。娶江木玄朴女嗣家。玄朴菽齋
外戚也。学于小竹、山陽、佃庵。受兵法於佐
水安樹。明治元年従征箱館。明治十四年十月八
日卒。
山岡次道。称卯八郎。後治左衛門。致仕号近衲。
明治四年卒。年五十四。曾興文武館、自主学塾于福山。

高知堂製

関藤々陰。明治十九年十二月廿日歿。年※四十九。
（朱）九年之　廿四日　誤
安藤々齋。称織馬。西方時為執政。
吉田豊辰。称為左衛門。号水山。嗣子弘藏。曾為
東京市助役。

（朱）※己巳六十三ナルトキハ七十一

拜誦仕候、本年飛雪之意氣ニ而は、寒ニ清
祥ニ相入候ニ漢篤、東坡、思ひ被讀野
氏帰来ニ節ニ葵ニ傳有ニ芳情事謹誦、又々
以鏡取至恩付、使中出、杜甫ニ其義ニ高
然ニ取申上候、

福山人雜

○百八十号

黄性凜至誌や、闊蔭ニ、陰ノ作ニ付（儀）親類伝、
蔭陰ハ本舊有取ノ人ニ付何レカニ附係下されて
傳記ニ掲載下されまじくや
於江木鰐水、門田朴斎ハ蔭陰ニ合せて福
山三先生ト称し居候、就ては、朴斎丈ニ而も表

承り候而江木師へ至りて一寸名字少々御揭
載有之十分願ク福山人ノ遺墟ヲ存候、而し
は是、可為成ハ是亦ハ付記ハ願中され可
申や
於蜀隴の謹として中試、蕃中和歌師
の停しあらハ松本長米良遠、ハ其、同師へ
先蕃野ニハ先生ニ学び福羽先生ニ親炙す
良遠并是実ニ美静先生のハ手しハ其ニ尤
様、付紙帖ハ割書屈鳥之情ニ入候、

百八十三号

榛柏二軒規論美談ニ付説レン幕府

諸宮執行相讓し第ニハ揭載有之か

○百八十四号

山室士彦、子彦ノ件

別冊の福山風雅集稿本。未開牡丹詩。古
詩策三冊ハ寸眼之ハ慶労し美出、可ハ一
覧ともて満悦子及之、猶真野幸作氏
より先生宛予ハ送付可仕候の事記有之付
山室氏ハ一冊願ス、於ハ朴甫喜北詩抄巻、

而々極類ノ件

山室汲古君六十一余亦同甲賦此奉贈

白頭相照旧襟期、家達依然共酒卮、唯羨

六句陪壽毋、所慚多累哺群兒、雲迎松梅
後凋色、雪裡梅薫連理枝、願得孫謀踰千
百歲、慶賦何免甲辰雌。　安政四年丁巳作

別作金井師ノ詩一首ヲ口號、供笑覧、

百々梅顚ニ付　北斎華北詩抄巻二
新暑ノ作ト緑陰ノ鉤ノ作トノ間ニ

葬百々櫻顚翁

慨今論古共周旋。斯與實經三十年。百折
世途心不屈、一生風節道終全。丹旌夕挂琳
宮月、素帳朝飄寶鴨烟、恨我髩霜愈更遍。
強随從此有誰憐。

安政六年己未ノ作

同
百八十四号

石坂白卿ハ福山人ニハ非ズ　藩中ニモ石坂姓
有之、也知れど此人ハ算術家らしく存候　昨年
下谷上野桜木町二十九番地文学士三上義夫
氏文部省ヨリカ算術家ノ取調ノ為ノ福山ニ出
張シ、其節石坂氏ニ付仰せられ、探索、記憶
ニ存候、不確実の点有之、且其事ノ序中添、

百八十五号

山室の記事中「茂某ハ恐らく伊茂一斎であらう」
とあるは、但福山藩ニ伊茂重龍先生ノ否定
他、弘道館之誠之館之、関係有之　是亦試

伊庭宗九ニノ云ヽと申すこと丈申述し、宗寡別
記ノ通ミハ其旨無之一応ハ御覧有之、

百八十七号

「門人の父の答であった」ハ正宗院の奉仕せし君
侯の若君様正樹お人よしの方の言とも少々及
びし様、先生ノ其論小子読聞と存せれへとも其
無御相違ニ而訳失礼、
於正宗院ノ旗本某ニ嫁したる者の盛況我ハ一
子を設けて旧主ノ君ニ仕ヘ一子六十余ニ至りて初めて
母子ニ而対面せしおとの免許も有し様少々又、
読ず様申、賢ハ右同ハ付記ニハ御明候し外

百九十四号

蘭門主様の岡西玄亭ノ家ハ後ニ岡ト改姓し
後代岡俊太郎(ノ父ハ寛甫(小島氏ノ書生))と申者四十余歳今西片町
十番地内ニ住せりとも子女ハ自私大様ニハ既
ニ逝物ならハ其詳ハ大底ハ外少書中添、
以上何れもハ為めニ成らぬ事とのみ申述ハ一
読の方ら一太切なる時子ハ甚だ盛ニ御座候ハ恐入
ノ儀ハ無数至急先ハ乍東ニハ御推察ニ祈之、
別紙二枚を所持在ノ儀 何物やらぬまで旬

因辰、以テ覧以手教下候、以書甚奉存、

福田禄太郎
敬具

森先生
函丈

山室恭（如石 其陽）
- 西湖上人（旧君菩提所定福寺ノ住職ス 朴斎詩抄中ノ定福寺上人トハ是人也）
- 山室汝右衛門 汲古
  - 養子 初メ糸井隆平（後糸井家ノ弱子死亡ニ付帰宗ス）誠之ト称ス儒者
  - 養子 後ノ 山室蛇陽

ノ様ハ了后